ノーサイト・ワールド

テディ・ベア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノーサイト・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ５６４０Ｙ

【作者名】
テディ・ベア

【あらすじ】
眼が覚めると妖怪・水人間になってました。どうやら私、『水の民』と呼ばれる珍しい種族になってしまったみたいで…。ていうかユニコーン？ドラゴン？わぉ、なんてファンタジー。そして私は誰だっけ？っていう展開。そんな私、ルトが、記憶を取り戻す旅に出ました。

※タイトル変更！すみません

おはようございます。

あー…うー、あー？ん゛ーっん゛ーっ、ごほん。
眼が覚めると、私は真っ先に咳払いをした。のどに、何か詰まっているような感じがした。

「う…あっ…あれ」

起き上がってみた。そして、あたりを見回す。周りは木々に囲まれていて、前にはレンガの小道がある。その先に、小さな家があるのが見えた。

「…んん？」

地面に手をついたが、ひやりとした感触に私はびくりとした。地面は…もっとこう、固かったような…。
恐る恐る地面を見ると…。

「みっ……水っ！？」

水の上に、浮かんでいた。
浮かんでいると言うより、私自身が水と言った方がいいだろうか。水に、上半身だけ出ていて、下半身は水の中――――のはず。なのに、下を見ると下半身がない。
上半身の水に接触している部分からだんだんと水のようになり、下半身は水の中に消えているのだ。
イメージ的には、ミルククラウンみたいな…あ、余計わかりにくい？すんまそん。

「……うわッ！？」

思わず、悲鳴を上げた。

何かが、意識に触れた。くすぐったいやら痛いやら…。　なんだろう、なんか、変な感じ。

感覚が…意識が、森に張り巡らされているような感じで、動物が森のどこかにある泉の水を飲んでいるのがわかる。どんな種類の動物が飲んでいるのかもわかる。

その泉にもう一つ視点ができているようだ。いや…もう一つどころか、この森の泉や湖、川など水に関するものすべてに視点が増えたようだった。

ちなみに先ほどから泉の水を飲んでいる動物は、雄鹿が二頭に、雌鹿が三頭、ペガサスが、いっと……。

「いや待て待て待て待て」

ペガサス？あれ、ペガサス？ここ、日本だよね？あれっちょっ……？

そう思いかけ、ふととどまった。

「…思いだせない？」

そうなのだ、思い出せない。

今までどこに住んでいたか、いつ生まれたのか――――つまり、自分は誰だったのかということが。

唯一思いだせるのが、私は女子高生で、日本に住んでいた、ということくらいだ。あ、あともんのすごいどこにでもいるような女子高生だったと言うことも覚えている。

「とりあえず、立とう」

ゆっくりと立ち上がってみる、と。
ザザザザザと音がし、水が私に吸い込まれていく。水は私の下半身を構成し、ついで？に服と下着、靴まで更正した。すごいな…。
ちなみに、私は今、どんな格好をしているんだろう。
…やばい、ものすごく気になる。自分の顔すらも覚えてないから、本当に気になるんだよね。鏡…全身が見える鏡が欲しい。
まさしくネットでよく見られる『ＯＴＺ』の格好をした時だった（こういういらない知識とかは覚えているんだなと思った）。

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザッ。

水が、鏡を構成した。

「…は？」

その時の私の顔は、あり得ないほどおかしかったと思うんだよね。

まず状況把握。

まず、あれから色々実験してみてわかったこと。
私は水から何でも作ることができる。服でも本でも食器でも、もちろん食べ物だって作ることができる。味もちゃんとするし、アメとかガムなら味がする（消えない）減らないものが作れる。そして私が作りだしたものは、私が一定以上離れると水に戻ってしまう。
でも、作りだしたものに意識を流し込み続けていたら１？以内だったらだが、離れていても大丈夫だった。

そして私の体について。
私は水を自由に操れるらしく、この森――１０ｍ以内にある水を自由に操れる。最初、森全域の水に意識を張り巡らせていたのだが、時間がたつごとに小さくなり、今は十メートルになってしまった。
そしてそれ以上に驚くこの体の特性。
意識していればどんな攻撃も私の体をすり抜ける。先ほど意識して手首を切ると、切り口が水になり、もう一度つながった。

つまり、無敵ということか。
でも注意しなければいけないのが、意識していると言うことだ。意識していなければ手首は切り落とされてしまう。手首を軽く切ってしまい、血が出てビックリした。
これに気をつけてさえいれば、人として生きられる。
ちなみに私の容姿は、真っ白――――純白の髪に赤い目。猫みたいに瞳孔が細かった。
服はワイシャツに黒いパンツだった。細身の体型で、キレイだけど中性的な顔つき、下着代わりにさらしを巻いているので、少年に見える。

ていうか、白い髪に赤い目、白い肌って不気味すぐる。
どうにかならんのか…と思ってたら、思わず水で青色のヘアカラーとカラーコンタクトを作ってしまった。まぁ、結果オーライ。

最後にこの世界について。
この世界は魔法、剣、騎士、ユニコーン、ドラゴンやエルフ、人間———まぁいわゆるファンタジーな世界だ。
私が眼を覚ました泉の近くにあった、あの小屋に会った書物からの情報だ。なんか暗号みたいでミステリアスな文字なのに、なぜか読めた。
うーん…あんびりーばぼー。
存在する種族は、エルフと人間、そしてとても希少で、存在するのかすらアヤシイという『火の民』、『水の民』、『雷の民』、『風の民』、『木の民』。私はこのうちの『水の民』らしい。
魔法の影響を受けて微かにだが動くようになった聖なる泉が、人間を食べてその生物の知識や魔力、特性を引き継ぐらしい。容姿も、食べた人間の容姿になる。餌…っていうか、食べるのは人間。エルフはまずくてたべられないらしい。

…ってことは、私は人間を食べることになるのかな。食べた人間の魔力や知識を蓄積していくそうだ。でも魔力の属性は変わらず、魔力の『量』だけを蓄積していくらしい。
ドラゴンは動物の部類に属するらしい。知能は人間ほどか、それ以上なのに…人間って、傲慢デスネ。
魔法は一人一人、平均一つの属性の魔力を持っていて、持っている魔力を使った魔法しか使えないらしい。ちなみに、魔力を判別する方法は、髪の色と眼の色だそうだ。
三つ以上属性を持っている人は希少で、そういう人は爪の色も違うらしい。
たとえば、Aさんが火の魔力と水の魔力、風の魔力を持っていた

とすると、赤毛に青い目、緑色のつ目だそうだ。
属性は『火』『水』『雷』『風』『木』の五つだ。

私は水の魔力と風の魔力しかもっていなかった。でも髪の色は関係がないらしい。通常なら『青い髪』と『銀灰色の目』のはずだからだ。適用されていないと言うことは、私はその他生物とは違うらしい。

魔法を発動するには、的確なイメージか、爆発的な感情の波が必要だそうだ。

呪文と言うのもなく、イメージするだけで魔法が使えるのだが、声に出した方がイメージしやすいために自作の呪文を作る。だから、できるだけカッコイイ呪文を考える人が多い。

ということは、魔力の量は関係ないのかと言う話になるが、そんなことはない。イメージを具現化するのに魔力を消費するのだ。魔力の使用量は、具現化するイメージによって変わる。

だから、私も先ほど色々実験してみたって言ったけど、服一枚作るのに、体力を限界まで使った。

…ＭＰ＝ＨＰってことか（マジックポイント＝ヒットポイント）

ふっ…厨２病だね。

そして感情の波によって発動する魔法だが、憤慨した時や、絶望の淵に立たされたときなどに、魔力だけが暴走する。それが、魔力の波によって発動する魔法だ。

余談だが、二つの魔力を合わせることができる魔法使いは、いろんな魔法を作ることができるそうだ。水と風を合わせ、『氷』に関する魔法、火と水をあわせ、霧を作り出すなど。

「ていうか…こんなに詳しい文献持っているなんて、この家の持ち主は学者だったのかな…」

この家の持ち主はもうしばらく帰っていないらしく、散らかっていてほこりが積もっていたりしたので、忍びこむことに罪悪感なども感じなかった。
その時だった。

甘い、甘い、甘そうな血の香り

ピクリと反応し、同時におなかがぐぅとなった。
何も、考えられなくなる。

「おいし、そう」

ふらふらと家を出、血の元を探す。
たどり着いたのは、森の入口だ。
鎧を着た騎士と思われる人間数人が、ユニコーンに槍を突き刺していた。どうやら、ユニコーンをいたぶろうとしたところ、蹄が足に引っ掛かり、男が足から血を流していたようだ。
それに激高した男が、ユニコーンをいたぶっているというところだろう。
なんて非道。食べても、文句は言えないよね。

舌なめずりをし、口から食べるのをためらった私は（絵面的にダメだろう）、手をドラゴンの首の形にし、男たちの背後に近寄った。

「……いただきまぁす」

ドラゴンの口をガパリと開き、男の首にかみつかせた。

聞こえた声。

めきっ、ばきっ。

男の首から血が噴き出し、骨が折れる音がした。

「ボ…ボウガ……？」

男の一人が、私が咥えている男に呼び掛ける。

ボウガと呼ばれた男はしばらくあえいでいたが、バキッ、というひときわ大きい音のあと、ビクッとして動かなくなった。

ドラゴンの腕は、私の意志の通りに男を上へ放り投げ、男を丸のみにした。咀嚼しなければのどを通らないので、そうすると骨の折れる音が一層不快に聞こえ、口から血がこぼれ始めた。

「ひっ……！」

どこからか少女の声がした。こんなむさくるしい男の集団の中に、一人の少女？ありえない。

だが、よく見るとリーダーらしき男につかみ上げられている少女がいた。ピンクの動きやすい、よくファンタジー映画に出てくるような仕事用のワンピース、バンダナ、茶色い革のブーツをはいている。

顔がいささか赤く、腫れているように見えるが、それはこの男たちが何らかの理由で暴力をふるったのだろう。

ドラゴンが飲み込み（といっても、感覚的には自分で食べ物を飲み込む感じなのだが）、私はにこりとした。甘い血とほどよい固さの肉がおいしい。骨も、ガリガリといい食感だ。

と、そこで気付く。

私はもともと人間だったはずだ。なのに

なぜ禁忌感を感じない？

それでも、本能がおいしいおいしい、もっと食べたい、おなかすいた、などと悲鳴を上げている。『水の民』は、人間が主食なのかもしれない。

「化け物っ……！！」

化け物？

ぴくりとこめかみがひくついた。

私は生きるために食べているだけだ。食べるわけでもなく、装飾品に利用するわけでもなく、ただ楽しむための殺そうとしているお前たちはどうなのか。

「お前たちが、一番化け物のようだがな」

そうつぶやいて、腕を振り上げ、次々と男たちを飲み込んで行った。なかにはまずい奴もいたりおいしいやつもいたりと、色々いた。多分、魔力の質や精神力などで変わるのだろう。

まずいやつは明らか臆病そうで、魔力も微々たるものしか放射していなかったし。

最後に残ったリーダー男は、少女を抱えて後ずさった。

「ばばばばばっ……化け物めっ」

「……その子を離しなさい」

私は静かな声で言った。

「はっ…はぁ！？お前とこいつに、何の関係があるんだ…！どうせ離しても、こいつを食べるんだろう！？じゃあ俺が人買いにでも売

って人の助けになるようなことをしてやるんだ！
そっちの方が充分有意義だろう！？」

何も言っていないのに、ぺらぺらとしゃべりだす。まったく、おしゃべりな男だなぁ。
リーダー男は少女を人買いに売るつもりらしい。人狩りか？ファンタジー小説的には、人狩りと呼ばれる展開だけれど。

「そうさ、俺は人狩りさ！騎士もやっているが下っ端だ、誰も俺の実力を認めねぇし、給料もすくねぇ！このままじゃ俺は餓死する…だから！いろんな種族を人買いに売ってやってるのさ！！」

あってたみたいだ。ていうかこいつの言葉、反吐が出る。最低だな。

「お前……なんで私がお前たちを襲ったのか、わからないの？」

うっすらとほほ笑みつつ、殺気立つ。証拠に、腕のドラゴンのうろこがだんだんと逆立って来ている。

「うわあああああああああああああああ！！」

男が剣を抱えて飛びかかって来るが、ドラゴンの首で一撃である。

「お前たちと一緒のこと、してるだけだよ」

そうつぶやいた。

「……うっ……」

頭をおさえた。とてつもない、激痛。頭の中から、針が飛び出し

てくるような痛みだ。

『ザ、ザザザザ』

その痛みの濁流の中になにか、ノイズがかかったかのようにかすかにしかわからないものが頭を通り過ぎる。

『ざざザざザザザざざザザ』

――――――――ごめ『ザザザざざざザざざ』……！！

――――――――『ざざざザざざざ』ルトブルーの、キレイだったよ……！！

ブツッとそこで途切れた。

風景は見えなかったが、言葉だけ聞こえた。たった二言、されど二言。これは、私の記憶なのかな……？

冷や汗が流れ続ける。切なそうな叫びだった。思いだすだけで、寂しい気持ちになるような…。

震える肩を抑えつけ、息を吐き、少女にドラゴンのほうではない手を差し伸べた。

「…大丈夫？」

私がドラゴンの首を手に戻しつつ、少女にたずねた。

ここでまた一つ気付く。私は自分の体を自由に作りかえることができるみたいだ。魔力がいるのは作りかえる時と元に戻す時だけ。維持する時の魔力はいらないらしい。

でも呆けていたりすると元に戻る。さきほどのリーダー男を食べた後呆けていたら、一瞬だけだがもとにもどったからだ。もしかす

ると、眠ったりしてももとにもどるのかもしれない。
少女を立ち上がらせようとするが、少女は手をとらない。
…あ、怖がらせちゃったかな。たしかに、人間食べる人間に見える生物見たら、そりゃあ怖がるよね……。
そんなことを考えていたら、少女がつぶやいた。
「『水の民(ウォラ・リエス)』様だぁ……」

…ん？この子は、今なんといったのかな？何語なんでしょうか？
そして、わかるはずのない言語なのに脳内で自動変換されると言うことは、私がこの姿になるきっかけをくださった（私に食べられた）一番初めのお方は、この言語を知っていたと言うことなのかな。
知識の中を模索していると、思い当たる。

あぁ、古代文字(ルーシャ)か。

古代文字(ルーシャ)と言うのは、その名の通り古代に使われていた文字…らしい。今では魔術や魔導書、魔法陣や、魔法に関するものだけに使われている……らしい！
らしいというのは、実際には知らないからだ。知識にはあるものの、確かなのかがわからない。誰の知識かもわからないんだよ。
ていうか、なぜこの娘は私が『水の民』ってわかるのかな。
「だって『水の民(ウォラ・リエス)』様は体を自由に作りかえることができて、この『水の森(ウォラ・フォレスト)』に住んでいて、とても美しいっていうんだもの！
私の村の、象徴ともいえる、守護者様なんですよ！」

ふふふと笑う少女に、私は何も言えなくなってしまった。
私が守護者？いつからそんな大層なものになったんだろう。それ以前に美しい？キミはちょっと、眼科に行った方がいいと思うよ。

「えっと……まぁ、とにかく、送って行くよ。あなたの村はどこ？」

苦笑いをしながら尋ねると、あっちのほう、と東の方を指差した。

あっちのほうって、アバウトな……。

聞こえた声。（後書き）

あれ、主人公ちゃんのセリフが定まらない…？
そして主人公ちゃんの名前がまだ出てこないと言う悲劇……。
これから一週間くらい更新滞在すると思いますが…すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5640y/

ノーサイト・ワールド

2011年11月22日00時24分発行